



いとう



海援隊旗(二色きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

胡馬 KOKA HOKUHU 北風

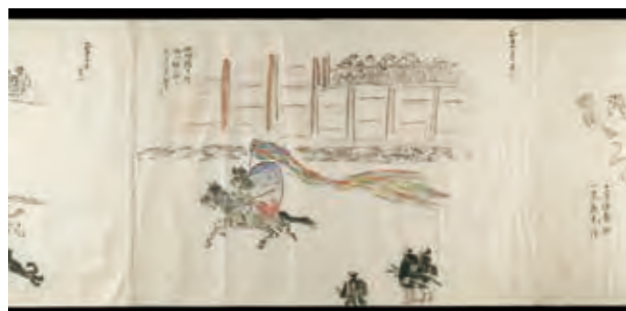
企画展

「龍馬が七歳だったころ―天保期の土佐の社会とくらし―」展

令和4(2022)年7月9日(土)～10月19日(水) 会期中無休

みなさんは「ふるさと」という言葉から、何を連想するでしょうか？波音、明るい陽射し、緑の山々、風のおい、郷土料理の味、家族の顔…どんなふるさとで生まれ育ったかによって、思い浮かべるものも人それぞれ。今回の展示は、大人になり他郷で忙しい毎日を送っていた坂本龍馬が、ふとした瞬間に思い浮かべたであろう故郷・土佐を題材とします。

たとえば、天保6(1835)年生まれの龍馬が数え7才だった天保12(1841)年、土佐を治めていたのは、藩主になって33年目の12代藩主・山内豊資(当時48才)でした。国内ではおもに東日本でおきた凶作による「天保の大飢饉」を経験した直後の厳しい時代で、特に経済面で社会の立て直しを図るため、幕府が「天保の改革」と呼ばれる改革を実施しようとしていました。世界に目を転じると、ちょうど同時期にイギリスと清の間でアヘン戦争が起き、清が敗北します。すぐ隣の国で起きた列強による植民地拡大政策の現実を目のあたりにし、日本国内でも次第



「土佐年中行事図絵」より駈初(高知県立図書館所蔵)

毎年1月11日に、藩主以下藩士たちが騎馬で城下を駆け抜ける駈初は、土佐藩の一大イベントでもありました

に対外的な危機感が強まっていきました。7才の龍馬を取り巻くこうした時代の空気感は、子どもだった龍馬の成長にも多かれ少なかれ影響を与えたことでしょう。

よく龍馬の子ども時代についての質問を受けますが、当時の坂本家の史料が残っていないため、明確に言えることは実はほとんどありません。「龍馬は寝小便たれだった」などという有名な逸話は、後世のフィクションと考えられています。従って今回の展示で

は、龍馬の幼少期ではなく、龍馬が幼かったころの「時代」について考えます。7才といえば、今でいう小学校1年生ぐらいの年令、龍馬が身を置いていた、今とはまったく違う時代について、どのように違うのか、なぜ違うのかについて、ぜひ同じ年ごろの小学生の皆さんにも考えていただきたいと思います。

亀尾 美香



天保12年当時の坂本家(推定) ※年令はすべて数え年 イラスト/川崎真優

左から 兄・権平28才 義姉・千野21才 龍馬7才 姉・乙女10才
祖母・久62才 父・長兵衛(八平)45才 母・幸44才

脱藩、そして幕末の「道」を辿る

「龍馬脱藩160年維新へつながる土佐の道」展を振り返って

今年度の第1回企画展は、龍馬脱藩160年という大きな節目を軸にした検証を行った。翌年に赦免されたとはいえ、青年龍馬にとって脱藩は決死の転機であったが、明らかでないことも多い。それゆえに人々の興味をひく出来事であり、継続した検証を行う必要がある。

企画展の展示解説には50人という人が会場にあふれた。マスク姿で私語を慎みながら熱心に展示をご覧になる人々の様子に、関心の高さを感じたものである。

前号の編集後記にあったように、同企画展を担当した高山学芸員は母校の大学教員になる転機を迎え、記念館を「脱藩」した。龍馬同様の志をもった雄飛である。高山氏本人による記念講演会「龍馬脱藩への道」も好評で、定員を超える勢いの聴衆をうならせた。

その高山氏に企画展担当者としての思いを紙面で振り返ってもらった。

前田 由紀枝

①「脱藩」か「道」か

本展のテーマが「龍馬の脱藩」に決まった時、それに直接関係する資料が不足することは明らかだった。今にして思えば、それを補うための方法として二つの方向性が考えられただろう。一つは、脱藩の対象を広げること。言



会場入り口

うまでもなく、土佐藩から脱藩を果たした人物は龍馬だけではない。龍馬以外の脱藩者の資料を集めることで、土佐の脱藩事情の全体像を提示する方法である。そしてもう一つが、道の対象を広げること。脱藩時以外の機会に龍馬が通った道、そして龍馬以外の人々が通った土佐国内の道、これらを紹介するという方法である。

これは後から思ったことで、実は展示を構成するにあたって、後者の方法しか思い浮かばなかったというのが正直なところである。龍馬の脱藩をテーマとする時、どうしても付いて回る問題が、いわゆる脱藩ルートである。当然、展示のなかでもこの話題を避けて通ることは許されないだろうとの思いが先行し、早々に「脱藩ルート」土佐

の道」という図式が成立していた。しかし、周知の通り、龍馬の脱藩ルートについては、一筋縄ではいかない課題が存在する。結果的にはこの問題について、「ほとんど分からない」と紹介するしかなかった。これは当初から分かっていたことだったのだが、したがって、龍馬脱藩の道を基礎に据えながら、それについてほとんど触れることができないという、奇妙な展示内容になったことは否めない。この点、期待に応えられなかったのであれば、大変心苦しい。

② 展示の特徴と成果

怪我の功名ではないが、結果的にはかえって新しい視点からの展示になったと考えている。上記の理由から、展示の柱は、当然ながら龍馬脱藩の実情をはじめ、藩主が土佐―江戸間を往復した参勤交代で通った道、そして多くの参詣者が行き交った四国遍路の道、この三点となった。大変重要なテーマであるがゆえに、それぞれがテーマとしては独立しており、これらが「土佐の道」として集約される機会は多くない。江戸時代そして幕末における土佐藩の道路事情が一覧できる展示ということで、それなりの意義はあったことだろう。なお、展示資料は、脱藩というテーマから、その多くが古文書類となった。そこで重要な位置を占めると考えたのが地図類である。文字資料が中心となった展示構成のなか、龍馬の脱藩に絡め

てそれらを効果的に配置できたのではないかと考えている。また、その思いを体現したのが、会場で配布したリーフレットである。その中面には、土佐全体が描かれた絵地図の資料画像をベースとして、その上に重ねて、龍馬脱藩の道、参勤交代の道、四国遍路の道、という展示の柱である三種の道を示した。手に取った方の好奇心に少しでも触れられたのであれば幸いである。

いずれにせよ、龍馬の脱藩を展示として成立させるためには、資料の数の制約から、必然的に龍馬のみならずその周辺事情にまで話題を広げざるを得ない。結果的には、それが龍馬の脱藩行為や脱藩の道を客観視することにつながり、学術的な観点を含めて、広い視野を提示することができたように思う。

龍谷大学文学部特任講師
高山 嘉明



熱心に展示を見る人たち



もうすぐ、待ちに待った夏休みですね。今年も龍馬記念館では、幼稚園児から中学生までの子ども向けのイベントやワークショップを開催します。

とさつこ幕末ツアー「浦戸から須崎へー海沿いの史跡を訪ねる」

県内の龍馬や幕末史ゆかりの史跡などをめぐるバスツアーです。今まで、龍馬の同志・中岡慎太郎について知ろう、と北川村の中岡慎太郎館をお訪ねしたり、龍馬脱藩の道をたどったり、吉村虎太郎を知るため、椿原町や津野町を訪ねるツアーを行ってきましたが、今年は、「浦戸から須崎へー海沿いの史跡を訪ねる」バスツアーを開催します。

県立坂本龍馬記念館から「花海道」と呼ばれる海沿いの県道を西に走ります。海沿いの道には、ジョン万次郎出航の地や武市半平太の銅像など、龍馬ゆかりの地が点在します。龍馬は慶応3年8月に、今回の目的地である須崎市にきています。

ご当地では幕末の砲台場跡や龍馬が首を切り落としたという言い伝えの地蔵がある発生寺などゆかりの地をめぐ

る予定です。

また、7月9日からの企画展「龍馬が七歳だったころー天保期の土佐の社会とくらしー」では、江戸時代の暮らしを紹介することから、それに関連し、日本の伝統的な調味料である「醤油」や「鰯節」に関連する場所も見学します。

ちなみに、須崎に向かう途中の横浪半島はリアス式海岸と言われる入り組んだ海岸線で、雄大な太平洋を眺めることができます。また、国指定の天然記念物「横浪メランジュ」という地震断層の化石もあり、実は、地質学的にたいへん重要な地でもあります。*「横浪メランジュ」の見学は行いません。

この夏は、浦戸から横浪半島を通して須崎にむかう、龍馬記念館のバスツアーで自然&史跡めぐりを楽しみましょう！

日時 7月31日(日) 8:30集合 16:00頃 解散予定(当館集合・解散)

定員 20名(参加者全員の人数)

対象 小学校高学年以上中学生

*参加者1名につき保護者は1名まで

*兄弟で参加する場合は兄弟1組に保護者1名まで

参加費 無料(昼食付)



昨年のバスツアーの様子

りょうま工作教室

夏休みといえば、工作!最近では、組み立てるだけで完成してしまう工作セットもあるようですが、江戸時代の子供たちは、身近なものをつかった工作を楽しんでいたのではないのでしょうか。当館も、「江戸時代流に」できるだけ身近な素材をつかった工作教室を開催します。

今年は、江戸時代の「履き物」に注目。低学年向けには段ボールの「ぞうりづくり」。高学年向けには本物の「わら」で「わらぞうりづくり」を楽しみます。どちらも「鼻緒」で足を固定させる構造で、そうした今の西洋式の靴との違いなどをみながら、自分だけの「ぞうり」「わらぞうり」を作ります。

①ぞうりづくりを楽しもう!

日時 8月7日(日) 9:30~11:30

対象 ①幼稚園児~小学校低学年(1~3年生)

②わらぞうりづくりに挑戦!

日時 8月7日(日) 14:00~16:30

対象 ②高学年(小学校4~6年生)

定員 どちらも10人(要事前申込)

会場 どちらも新館1階ホール

*保護者同伴のこと



りょうまお楽しみワークショップ

今年の夏は、短時間に楽しめるお手軽ワークショップを開催し、「紙の刀」や「紋切うちわ」をつくります。どちらも事前申込は不要。15~30分程度で完成します。

*所要時間は標準です。個人差があります。

①紙で刀を作ろう!

日時 8月14日(日) 10:00~12:00/13:30~15:30

対象 幼稚園児~小学生 *幼稚園児、小学校低学年は保護者同伴のこと

定員 各回15名(先着順)

*席がうまっている場合はお待ちいただくことがあります。

②紋切うちわを作ろう!

日時 8月21日(日) 10:00~12:00/13:30~15:30

対象 幼稚園児~小学生 *幼稚園児、小学校低学年は保護者同伴のこと

定員 各回10名(先着順)

*席がうまっている場合はお待ちいただくことがあります。

どちらも参加費 無料

申込 当日申込

開始時間15分前から受付開始

会場 本館 地下1階 「夕顔」前





「武士の時代を考える——その制度・精神・象徴」

「連続講演会」は、ひとつのテーマに基づき、2か月に1回、年間5回の講演会を開催しています。

リニューアルオープンした年に始めて、今年で5回目となります。

今年度のテーマは「武士」です。

「武士」は「侍(さむらい)」ともいわれ、朝廷や貴族に「さぶらふ者」に由来します。彼らは平安後期から力をつけ始め、明治維新までの約700年間の大半において、日本の政治、経済、文化の中樞を担う大きな存在であったということに異論はないでしょう。

坂本龍馬は土佐藩の下級武士の家に生まれましたが、坂本家の本家は土佐藩屈指の商家でもあったことから、彼は比較的柔軟な考えと経済活動に関心を持っていたとも言われています。他方で「二君に仕えず」と、武士らしい古風な考え方も見受けられます。こうした、一見相反するかのような龍馬の姿勢は、新しい政権体制の樹立が急務となり、「武士」の時代が大きく変容しよ



昨年度の様子

うとする幕末史の潮流であったのかもしれません。

江戸後期を中心に、「武士」の身分、精神や「武士」を象(かたど)るものなど、武家の時代のそのありようについて、5回シリーズで迫っていきます。

河村章代

		講師・肩書 *敬称略	演題
1	6月18日(土)	笠谷和比古 (国際日本文化研究センター名誉教授)	武士と武士道の歴史
2	8月27日(土)	原 史彦 (名古屋城調査研究センター主査)	徳川将軍と大名
3	10月29日(土)	森下徹(山口大学教育学部教授)	城下町萩と武士の暮らし
4	12月17日(土)	尾脇秀和(神戸大学経済経営研究所研究員、 花園大学・佛教大学非常勤講師)	武士と帯刀
5	令和5年2月25日(土)	尾本師子 (高知県立高知城歴史博物館主任学芸員)	武家の空間—絵の役割

なお、講演会終了後に録画配信を行う場合がありますので、ぜひご覧ください。
(全回ではありませんので、ご注意ください。)

◆大切なお知らせ◆ 連続講演会の申込方法がわかりました。

今年度から、聴講申込受付を

○開催月の前月1日午前9時から受付を開始(例: 8月27日の申込⇒7月1日午前9時から)します。

○電話、メール、FAXやホームページのイベント申込フォームで受付とさせていただきます。

(午前9時以前にかかった電話、到着したメール、FAX、申込フォームは無効とします。)

また、複数回分のお申し込みはできませんので、ご了承ください。

龍馬の手紙

15

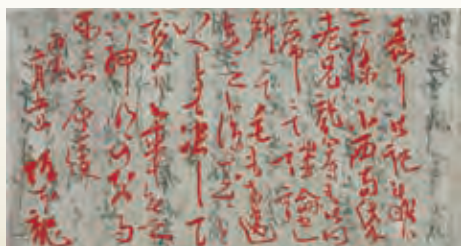
薩長同盟裏書 二

令和三年秋、「開館三十周年記念 坂本龍馬真筆展示」において、宮内庁書陵部所蔵の、いわゆる「薩長同盟裏書（書陵部での書名は『木戸家文書』以下、『裏書』）」が展示された。前号では裏書の展覧会への出陳頻度、映像や書籍への掲載回数について触れ、変わらぬ関心の高さを示したが、今回は裏書の筆致に注目してみたい。

図版にも見られるように、この裏書は末尾に「丙寅（慶応二年）二月五日」の日付がある。この裏面、つまり本来は表面である龍馬に宛てられた木戸孝允書状は正月二十三日の日付を持つが、この日は龍馬が寺田屋事件で右手の親指と中指、左手の親指と人差し指を負傷した日であった。よってこの裏書は、襲撃から十数日後に書かれたものといふことになる。

裏書を書いた翌日、慶応二年二月六日付の龍馬書状（木戸孝允宛）には「唯今八手

きす（傷）養生中」とあり、裏書執筆時にも傷はまだ完治に至っていないようであるが、筆圧が強い上に線質に乱れはなく、堂々とした書きぶりであることに驚くばかりである。朱墨を用い、くずし字を用いることもなく、丁寧な字形で書かれていることもまた印象的である。字形面では三行目「表に」の「に」、四行目「席」、七行目「決して」の「し」、九行目「神」に見られる縦に長い線が特徴的と言えよう。この筆圧の強さと丁寧な筆致は順調な回復経過によるものか、あるいは木戸への敬意のあらわれか、はたまた負った責務の大きさによるものか、歴史を左右した書を前に考えると、興味が尽きることはない。



田代圭一

（宮内庁書陵部図書課保存調査室主任研究官）

私のおすすめ

No.15

キヨロキヨロしてもらいたい場所♪

「幕末広場」

私がおすすめしたいのは、本館2階にある「幕末広場」です。

2018年にリニューアルオープンした当館では、新館・本館と2つの建物を中心に、それぞれが異なる展示スタイルで坂本龍馬と幕末という時代についてご紹介しています。

本館の「幕末広場」では、8つのコーナーを通して幕末の時代を楽しく学んでいただく事ができます。

特におすすめなのが、連なる3つのコーナー「脱藩・勝海舟との出会い」「薩長同盟」です。

白と黒を基調とする「脱藩」コーナーでは、当時の繊細な緊張感を感じつつも、目に留まる紹介文や展示物にグッと惹きつけられます。

一転して、明るい白を基調とした「勝海舟との出会い」コーナーは、POPなイラストや文字に加えて、軽やかな音声ガイダンスで新しい出会いの躍動感が演出された空間です。

イラストを交えた映像で、薩長同盟を分かりやすくご紹介するのが3つ目のコーナー「薩長同盟」。独創的なタッチのイラストと講談師の小気味よい

語り口調で展開される、映像は新旧入り混ざったとても面白い構成になっています。

「見る」・「読む」だけではなく、自ら「知りたい」という好奇心から視界が広がるこの広場では、お子様にも楽しみながら歴史の一角に触れていただけたらと思います。

是非、ご来館の際には、新館と本館、それぞれの魅力をご堪能ください。

また、年を重ねて再び来館され、以前の記憶と共に、改めて当館を満喫いただけますと幸いです。



「幕末広場」内「勝海舟との出会い」コーナーの一面

野村瑞穂

館職員がリレーで書き継いできました「私のおすすめ」は、館内外のご紹介がひと通り終わったことから、今号で最終回とします。長らくのご愛読、ありがとうございました。

学芸員という立場にいる
と思いがけない歴史の展開や、
通常では出会えない場面に立
ち会うことがある。学芸員冥
利というところだろう。

近年のことでは龍馬佩刀や、
焼失したと思っていた龍馬書
簡などの出現が浮かぶ。具体
的な遺品の出現によって、坂
本龍馬という存在がより確か
なものとなる瞬間である。そ
れらは、龍馬の遺族が渡って
行った北海道が舞台である場
合が多い。

4月下旬というのに、札幌で
さえ残雪があった。郊外の山は
まだ雪化粧を忘れていない。高
知では季節は春から初夏に向かっ
ていたのに。

特別展の借用資料返却で道東
から道央を回り、関係者への返
却とご挨拶を終えたまま、室蘭
市へ向かった。行先は、日本製鋼
所M&E株式会社室蘭製作所に
ある瑞泉鍛刀所である。

同市に近づくにつれ、風景が
違ってきた。北の海特有の蒼さ
を残雪が際立たせていた。同じ
太平洋でも高知は無論、襟裳岬
以東の海とも違って見えた。西に

は樽前山がどっしりと構えている。
教科書でも学習する重化学工業、
鉄の町、港湾都市の様相である。
日本製鋼所M&E株式会社は
圧倒的な存在感であった。同社
は明治四十(1907)年、国策
による日英合弁の民間兵器製造
会社として創業し、100年以
上の歴史を持つ。北海道の、ひい
ては日本の産業を牽引してきた
製鋼所である。

また廃刀令以後、衰退しつ
つあった日本刀の鍛刀技術の保
存と刀匠擁護のため、大正七
(1918)年に瑞泉鍛刀所を
開設した。そこに招聘された刀
匠は、戦前屈指の名工と言われ
た堀井俊秀である。

私が瑞泉鍛刀所を訪ねた日、
俊秀を初代とした堀井一門4代
目の堀井重克(刀匠名・胤匠)さ
んが待ってくれていた。温和な
雰囲気を持った方であるが、刀
鍛冶という仕事

に長年携わって
きた人ならではの
の律儀と誠実
を感じる。今
は5代目を
佐々木胤成さん
が継がれている
が、佐々木さん
もまた柔らかな
物腰と異なる鋭
いまなざしが印
象的であった。



資料館で鍛刀過程を説明する堀井重克さん

堀井重克さんの祖父俊秀によっ
てとられた龍馬佩刀の押型(刀
の刀身の形や茎や銘を写し取り、
刃文などを書き込んだ記録)が
鍛刀所併設の資料館に所蔵され
おり、私は堀井さんやそれを見
つけた方たちとともに『俊秀押型
集』を拝見した。

押型集には龍馬の遺族である
坂本家に伝わる長刀2振、脇差
1振、短刀2口の押型が残され
ていた。龍馬佩刀であるこの5
点は、大正二(1913)年暮れに、
当時坂本家が居住した釧路の西
幣舞大火で罹災し、主には研ぎ
直しをされている。

罹災後の記録としては昭和初
期の書き物しかなかったが、大
正十三年、研ぐ前の状態で記
録されていたのである。昨夏こ
の情報に驚いたものだが、目の
当たりにすると新しい発見も
あった。これらの顛末については、

『高知県立坂本龍馬記念館研究紀要第4
号』(2022年6月発行)に拙稿「坂本龍
馬佩刀押型の一考察——『俊秀押型集』につ
いて」として収録した。

刀剣の世界は深い。材である鋼から鍛刀。
研ぎ、拵えと広がり、近年は美術品として
の価値が高い。「地金が出る しぎを削る
切羽詰まる」等々多くの言葉も刀の世界か
ら生まれている。しかし本来は武士の魂とも
いわれる武器である。妖刀という言葉もあ
るように、刀の魅力に憑りつかれる人もいる。
さほど奥の深い世界だ。

瑞泉鍛刀所で会った二人の刀匠。堀井さ
んや佐々木さんの肅々とした姿は、私の脳裏
に焼きついている。かつて訪ねた福岡市の研
師黒田守寿さん(故人)にも同じ気迫があっ
た。刀剣の世界に生きる人の清冽な空気を、
私は胸深く吸った。



鍛刀所内で刀を持つ佐々木胤成さん

松浦武四郎記念館を訪ねて

本年4月24日に松浦武四郎記念館(三重県松阪市)がリニューアルオープンを迎えられました。この記念式典にお招きいただきましてので参画してきました。

同式典には、松浦家二族をはじめ、田村前厚生労働大臣や二見三重県知事も招かれ、私の前列に参席されていました。参画のきっかけは、昨年、当館が開催した開館30周年記念の特別展『龍馬と北の大地 第一部「蝦夷地へのまなざし」龍馬と幕末の志士』において、松浦武四郎記念館より国指定の重要文化財を含む数多くの資料群を借用し展示したことに遡ります。

先の特別展は、開館30周年らしい展示をと企画しました時に、龍馬の新しい国づくりに向けた二つの大きな構想に着目しました。一つは幕府や朝廷の枠にとらわれない新国家の構想であり、もう一つは蝦夷地開発の構想です。龍馬は大政奉還を成し遂げ新政府綱領八策を著しましたが、もう一つの構想は龍馬が志半ばで斃れたことにより幻と消えました。

そこで、特別展の第一部では、龍馬の蝦夷地行きの計画と、その決意の書簡に込められた龍馬

自身の言葉や、幕末の志士の蝦夷地観に大きな影響を与えた松浦武四郎翁の足跡などに注目し紹介することといたしました。そして特別展を通して、龍馬の蝦夷地開発の構想は、公私あわせて6度の蝦夷地探検を行った幕末随一の蝦夷地通であり、「北海道」の名付け親としても著名な松浦武四郎翁の業績がベースになっていることに迫りました。龍馬と同翁の交流の記録は確認されていませんが、両者と交流のあった土佐勤王党のメンバー北添倍摩を通じて、龍馬が同翁を強く意識しその資料を手して開発構想を練った可能性が高いという見方をお示ししています。

松浦武四郎記念館では、国の重要文化財1500点余りを含めて、武四郎翁関連の資料約3000点を収蔵されています。ちなみに松阪市には本居宣長記念館が立ち、同館の収蔵資料は「古事記伝」など国の重要文化財を含めて約16000点ということであり、同館にも武四郎翁ゆかりの資料の借用をお願いし快諾をいただきました。なんと松阪市は重文指定資料ゆかりの歴史上の人物を2人も輩出されているので驚きです。



松浦武四郎記念館(三重県松阪市小野江町383)
写真提供/松浦武四郎記念館

特別展第一部の記念講演会(令3.11.20開催)には、松浦武四郎記念館の山本命主任学芸員をお招きし、「松浦武四郎と幕末の志士」をテーマにご講演をいただきました。好評を得ることができました。リニューアルオープン記念式典のセレモニーでは、主催者である竹上松阪市長から、山本主任学芸員が本年4月に松浦武四郎記念館の館長に就任されたとの紹介がありました。当日の内覧会では新館長より、今回のリニューアルに合わせて常設展示の資料群を更新したことや、今後とも新たな企

新職員紹介

本年、4月1日付けで高知県立坂本龍馬記念館の副館長に就任しました。私は、幕末など日本史上の人物伝が好きなことや龍馬脱藩ルートの特原町が故郷であることから、当館で働けるようになったことを大変うれしく思っています。まだまだ、経験と知識が不足していますが、来館された皆様が満足され、また来々なる館となるよう、経験豊富な職員とともに懸命に努めてまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

今秋からは桂浜周辺の各種ショップの改装プレオープンも予定され、益々の賑わいが予想される桂浜。一人でも多くのお客様に、当館はもとより、桂浜周辺、広くは高知県全域を満喫いただける一助となれるよう日々努めてまいります。今後とも、宜しくお願いいたします。



廣瀬 成典



野村 瑞穂

画も公開していくとの説明がありました。また、武四郎翁の書斎「昼敷」の原寸の模型がきめ細かなエイジング加工により再現をされており、書斎に上がることもできるとの紹介がありました。

ぜひ一度、多くの皆様方に訪れていただき、龍馬と海援隊にとつての先生でもあった松浦武四郎翁の息吹を深く体感していただければと思います。

■「龍馬脱藩 維新へつながる土佐の道」展を振り返って

企画展「龍馬脱藩160年 維新へつながる土佐の道」展の関連企画として開催した今回の展示は、高知県から愛媛県へ抜ける龍馬が通ったと思われる脱藩の道周辺の景観などを、「龍馬ゆかりの名所」と「今のおすすめスポット」として合計14ヶ所を特大地図と写真パネルで紹介しました。

「龍馬ゆかりの名所」としては、高知市上町1丁目にある「坂本龍馬誕生地」をはじめ、才谷屋の守護神である高知市神田の「和霊神社」、津野町にある「吉村虎太郎像」と「吉村虎太郎生家」、梶原町の「維新の門」、そして、高知県梶原町と愛媛県西予市の県境にある「葦ヶ峠」と「九十九曲峠」の7ヶ所となります。

「今のおすすめスポット」としては、梶原町にある隈研吾氏設計の「梶原町総合庁舎」と「ゆすはら雲の上の図書館」、また「神在居(かんざいこ)千枚田」を紹介しています。そして津野町にある、広大な「四国カルスト・天狗高原」、「星ふるヴィレッジTENGU」、全国のセラピーロードの中で最も標高の高い「森林セラピーロード」、また、森の中のアウトドアパーク「フォレストアドベンチャー・高知」の7ヶ所となります。



また今回特別企画として、高校生による観光動画コンテスト、一般社団法人 NEXT TOURISM(ネクストツーリズム)主催「観光甲子園2021「SDGs 修学旅行部門」」でグランプリを受賞した高知県立梶原高等学校の動画を紹介しています。偶然、テレビで梶原高校の生徒さんがグランプリを受賞されたニュースを拝見したのがきっかけで、展示紹介に至りました。

この作品について、ご担当の山下聖先生は、「坂本龍馬が日本を変えたいと土佐を脱藩した強い思いを受け継ぎ、その脱藩の道を中心に、現在注目されている「SDGs」のエッセンスを加えた作品で、「日本をせんたく」という龍馬の有名なことばに注目し、現代の皆さんの考え方を『せんたく=洗濯=選択』したいと願い、その強い気持ちを表現した」と言われました。



高校生という立場から、梶原における自分たちの回りの環境や状況をしっかりと見つめ、探求していく姿勢や郷土を愛する熱い思いが、私には「未来へ続く土佐の道」のように思えました。

会場には梶原町と津野町の名所観光のリーフレットも設置し、入館者の方々が、リーフレットを片手に談笑を交えて地図と写真をご覧くださる姿もお見受けしました。



今回の展示が、龍馬脱藩の道や龍馬ゆかりの名所、また、梶原町や津野町などのおすすめスポットを訪れるきっかけになれば幸いです。

中村 昌代

入館状況

2022年6月20日現在

(1991年11月15日開館以来 30年218日)

◆入館者数 4,443,573人

■リニューアルオープン(2018年4月21日)以来 506,813人

編集後記

夏の企画展「龍馬が七歳だったころ」展の隠れたテーマは「ふるさと」です。ふるさとのありがたさは離れて初めて分かるもの。龍馬も、土佐というふるさとの物心両面から支えられていたことを、脱藩後に痛感したのではないのでしょうか。

龍馬の時代と違い、今ではふるさとの人と顔を見ながら通話できたり、ふるさとの食べ物を遠方でも取り寄せたりできる時代。ふるさとに帰れないなら、そうしたツールを利用してふるさとに親しむのも一興かもしれません。(か)

館だより「飛 騰」第122号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏

発行日 2022(令和4)年7月1日

発行 公益財団法人高知県文化財団

高知県立坂本龍馬記念館

〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015

http://www.ryoma-kinenkan.jp

「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休

入館料 一般 500円(企画展開催時 700円)

高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。

〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで